

2019年度 第20回
高校生エッセー・コンテスト

～教育の大切さを訴え続ける～
難民出身のユニセフ親善大使



マズーンさんに 手紙を書こう

Anthology

作品集



© UNICEF/UN060498/Sokhin



津田塾大学
TSUDA UNIVERSITY

シリアで暮らしていたマズーン・メレハンさんは2013年、紛争から逃れるため、家族とともに国境を越えました。当時14歳。父親から「一番大切なものだけを持っていくように」と言われたマズーンさんは、迷わず教科書だけをバッグに詰め込みました。ヨルダンの難民キャンプで過ごし、英国に定住するまでの3年の間、彼女は学ぶことを決してあきらめませんでした。難民キャンプ内にも学校があることを知り、「希望を持てるようになった」と言います。

しかし、早婚や単純労働を余儀なくされるなどして学校に行くことをあきらめてしまう子どもたち（とりわけ女の子）もたくさん見ました。マズーンさんはテントを1張ずつ訪ねては「子どもたちを学校に通わせてあげて」と大人たちを説得し続けたそうです。

2017年、マズーンさんは難民としては初めてユニセフ（国連児童基金）の親善大使に選ばれました。教育を受け、知識を得れば、生き続ける力となり、前向きな未来につながる。「すべての子どもたちに教育を受ける権利を」とマズーンさんは精力的に活動しています。

裏面の英文は、2017年7月、ドイツで開催されたG20サミットに合わせてマズーンさんが発信したメッセージです。「親愛なる難民の友人たちへ」となっていますが、紛争などにより学校に通えなくなった何百万人もの子どもを代表した訴えになっています。この文章を読んで、マズーンさんに自由に手紙を書いてください。日本で暮らす高校生のみなさんにとって、難民問題は遠い国の出来事と映るかもしれませんが、難民と呼ばれる人たちにも故郷や家があり、学校に通い、友人と夢を語り合う、ごく普通の生活があったのです。現代社会の重要な問題のひとつである「難民」に、想いを寄せてみてください。

Index

入賞作品	3
講評	4
最優秀賞作品	5
優秀賞作品	6
募集要項	12
応募者在学校一覧	13

Powerful letter

by Syrian refugee and activist Muzoon

Some people call us the lost generation. We are not lost.
We have not lost our love of learning.
We have not lost our dreams for our future.
We have not lost our hope.

Dear Fellow Refugee,

I want you to know that life will get better.

It is not that long ago that me and my family were right where you are now. Exhausted, scared and not knowing what tomorrow will bring.

I was 14 years old and in my last month of grade 9 when the bombing started. I loved my home. It was such a happy place. We had to leave everything behind and find somewhere new to start over. I was so scared. I didn't want to leave.

I know how you are feeling right now. It may feel like everything is dark and hopeless, but there is light ahead. Look how much you have been through and you are still standing. You are much stronger than you think.

Me and my family spent 3 years in a refugee camp, much like yours, and it is there that I started learning again. But in the camps, I saw many people—many girls—give up on education. Many would never return to school.

I want to encourage you not to give up on your hopes and dreams for the future. Do everything that you can to stay in school because an education will help you build that future. With knowledge, we grow stronger.

You may feel that no one will ever hear your voice, I want you to know that I hear you, and I am fighting for you and your right to an education.

One day, I hope to hear your stories about how my fellow refugees became engineers, doctors, lawyers and teachers. And how many returned to their homes, their countries – to build a new life, one better than before.

Never stop learning and never stop dreaming.

Never lose hope.

Sincerely, Muzoon





入賞作品

応募作品 872編 (英語作品368編、日本語作品504編)

選考の結果、次の方たちが最優秀賞・優秀賞に選ばれました。(アルファベット順)



賞状 及び 副賞 5 万円

最優秀賞

長崎県 県立諫早高等学校 2 年 (インド留学中)

山邊 鈴 さん (日本語)



賞状 及び 副賞 1 万円

優秀賞

千葉県 県立生浜高等学校 3 年

カー フィリシア万理香 さん (英語)

東京都 中央大学高等学校 3 年

橋本 咲弥 さん (日本語)

兵庫県 神戸大学附属中等教育学校 4 年 (高校 1 年)

木下 景文 さん (日本語)

長野県 ユナイテッド・ワールド・カレッジ ISAK ジャパン 2 年

久我 優衣奈 さん (英語)

中国 上海中学国際部学校 Grade11

王 萌 さん (英語)

東京都 立教女学院高等学校 2 年

山本 千聖 さん (日本語)



第20回
エッセー・コンテスト
審査委員

委員長 / 大島 美穂 (津田塾大学 ライティングセンター長 総合政策学科教授)

委員 / 松山 章子 (津田塾大学 多文化・国際協力学科教授)

委員 / 大原 悦子 (津田塾大学 ライティングセンター客員教授)

講 評

高校生エッセー・コンテストは、津田塾大学創立100周年を記念して2000年から始まり、今年ちょうど20回目を迎えました。毎年、ある人物に宛てた手紙形式でエッセーを書いてもらいます。今回は、難民として初めてユニセフの親善大使に選ばれたシリア出身のマズーン・メレハンさんへの手紙でした。2017年7月、ドイツで開催されたG20サミットに合わせてマズーンさんが発信したメッセージ(英文)を読んだうえで書いてもらいました。応募総数は、ここ数年では最多となり、関心の高さがうかがえました。

審査員全員一致で最優秀賞に選ばれたのは、山邊鈴さんの作品です。インドに留学中の山邊さんは、電気もなく、70名が教室にひしめくような過酷な環境で学ぶなか、「教育を受けることが当たり前ではない」ことを実感します。原子爆弾で死の町と化した故郷・長崎や、インドのスラム街で学ぶ子どもたちの現状にも触れつつ、「学校をすべての子どもたちの扉を開く場所にできるよう頑張ります」と、力強く決意を述べました。山邊さんの作品は構成、オリジナリティー、表現力など、全てにおいて圧倒的な力を持ち、審査員一同の胸を打ちました。

優秀賞に選ばれた6編も、難民問題や教育問題、夢をあきらめないことの大切さなどを、高校生たちが自分なりにしっかりと考え、表現した力作ばかりでした。

なお、今回のコンテストでは公益財団法人日本ユニセフ協会からマズーンさんのテキストや写真などを提供いただきました。この場をお借りし、感謝申し上げます。マズーンさんは優秀作品を読み、ビデオメッセージも送ってくださいました。山邊さんの受賞作品朗読のビデオと共に2020年3月末まで本学ホームページで公開していますので、ぜひご覧ください。

<https://www.tsuda.ac.jp/aboutus/essay/2019result.html>

2019年度 第20回高校生エッセー・コンテスト 審査委員長

総合政策学科 教授 大島 美穂



最優秀賞

長崎県立諫早高等学校 2年

山邊 鈴 さん

Rin Yamabe

“My father decided to educate his daughter. That’s why I’m here”

親愛なるマズーンさんへ。雨の降るイギリスで、晴れ渡る故郷シリアの空を想うことはありますか。もしそうであれば、私も仲間です。私は今インドの田舎町に長期留学しています。涼しい日本に思いを馳せつつ、灼熱の国で闘っています。

出国前あなたの活動を知り手紙を書こうとしましたが、どうしても書けませんでした。私は日本の学校が大嫌いだったからです。黙って先生の話を聞き、学校と家を行き来する毎日。押さえつけられる日々が苦痛で仕方なくて。そんな私には、教育のため命を懸けているあなたに手紙を書く資格はないと思っていました。逃げるようにしてやってきたインドでも、私は苦しみました。70人がぎゅうぎゅう詰めになって座っている教室。そこに電気はなく、汗だくで皆が勉強しています。60分の8時間授業。休み時間ありません。なにより私を悩ませたのは、友達の勉強意欲の高さでした。どれだけ過酷な環境でも皆キラキラした目でペンを走らせます。先生が宿題を出さないと全員で抗議。なぜこんな地獄のような場所で頑張れるのだろう.....私は甘えているのかな、贅沢なのかな。情けなくて、帰ろうと何度も思いました。

そんな私を変えてくれたのが、冒頭の友達の言葉です。

「お父さんが教育を受けさせてくれたの。私は村で唯一教育を受けられた女の子。寮生活は辛いけど学校に行けるだけで幸せ! 頑張って勉強して村の役に立つ人になりたい。」

Educate. 聞き慣れたその堅苦しい動詞が、カラフルな光を放った瞬間でした。そうか。教育は当たり前じゃない。先生がいて、学校があって、親の理解があって、はじめて私は教育を受けられている。自分の頭で考えている。その奇跡に頭がぼうっとしました。Educateの語源はラテン語のe-(外へ)+ducere(導く)だそうです。内に秘めた可能性を引き出してくれる教育がなければ、人は自分を輝かせることはできません。暗い部屋に閉じ込められ、自分が何を持っているのか見えないまま、ただ歩く.....それはどんなに怖いことでしょう。

私のまち長崎は、74年前原子爆弾により死の町と化しました。そんな中、何よりも早く立ち直ったのは学校だったそうです。未来をつくる子どもたちが学びはじめるということ。それは「私たちは、這い上がれる。すべて燃えても希望は燃えない。」という人々の高らかな叫びだったに違いありません。

私は今、毎日スラム街に出向き子どもたちの学校出席率を上げる活動をしています。両親を説得するだけでは上手くいきません。月経中の女性は小屋に籠るという慣習のため母親に会えなかったり、学校の質の悪さを指摘する人がいたり、家族の看病をしなければならぬ子がいたり。問題が複雑に絡み合っており、投げ出しなくなることもあります。そんなとき私が思い出すのは、マズーンさん、あなたです。「聞き入れてくれなくても、伝え続けなくてはなりません。もし諦めたら、子どもたちは人生において何も成し遂げられないでしょう。だからこそ私たちは、気持ちを強く持ち、決して諦めてはいけません。」あなたの真つすぐな瞳がいつも私を支えてくださっています。

私の夢は、全ての子どもたちが自分の未来を自分で切り拓ける世界をつくることです。そのために、私は学校に行けない子どもたちは勿論、日本の子どもたちも救いたいと思っています。夏休みが終わる最終日に自殺をする子どもたち。いじめや教師からの圧力に苦しんでいる子どもたち。そんな彼らの声にも耳を傾けて、学校をすべての子どもたちの扉を開く場所にできるよう頑張ります。マズーンさん。いつかあなたにお会いできたとき、あなたの故郷のように晴れ渡った笑顔でお話ができますように。

山邊 鈴

優秀賞

千葉県立生浜高等学校 3年

カー フィリシア万理香 さん
Phyllicia Marika Carr

Dear Ms. Muzoon,

I was struck by the honesty of your emotions when I first read your letter. As I reread it, I became aware of an unwavering sense of hope amidst all the chaos that was taking place around you on a continued basis. The simple four-letter word repeated so often by so many over the years.

Hope. Reading your letter made me want to dig deeper into what hope and ultimately resilience meant.

I am an eighteen-year-old girl attending high-school in Japan. I also have the experience of living and attending school in my father's country, Jamaica. Being able to attend school for me has always been a right. Your letter opened up my eyes to the privileges that I had been taking for granted. You emphasized the importance of education, especially that of girls, in creating opportunities that would serve women far and wide. Japan too has had a long history of discrimination towards women.

Earlier this year, the Japanese Government announced that it would redesign the five thousand-yen bank-note to feature Tsuda Umeko, one of the earliest pioneers of women's education in Japan. Umeko went on to establish the first liberal arts college in Japan in an era where women's education was severely constrained.

What struck me about Umeko, as well as your letter, was how you have turned the setbacks that would normally have rendered people hopeless. You have provided through your experiences a positive impact on countless others. There is a famous African proverb and I quote, "If you educate a man you educate an individual, but if you educate a woman you educate a nation." This emphasizes the absolute advantages of providing women equal opportunities in education, a point shared by many including yourself and Umeko.

It is my belief that there is a light at the end of every tunnel. With the right mindset there is no obstacle that we cannot overcome together. This mindset can only be acquired through discipline, a clear vision, a clear conscience, and a genuine desire to do good in the world. As I prepare myself to go onto study at university, I am determined that I will step forward with the vision to make this world a better place. My hope is to join the United Nations and work to enhance women's education, especially in developing countries.

In closing, I would like to thank you for sharing your personal experiences. You have opened my eyes to what it means to have a vision, have the resilience to follow through with it, and to create hope in a seemingly hopeless situation.

Sincerely yours,
Phyllicia Marika Carr

優秀賞

中央大学高等学校3年

橋本 咲弥 さん

Saya Hashimoto

マズーン・メレハンさんへ

どんな状況下でも学ぶことを諦めない、その強い精神できっと多くの人が救われてきたことでしょう。

私は日本に生まれ、日本で育ち、高校生の現在に至るまで何不自由なく暮らしてきました。日本では義務教育という制度があり、6歳から15歳の9年間は子供の教育を受ける権利が保障されているので、教育面で困ることもほとんどありませんでした。しかし、私は義務教育制度には利点ばかりではないと感じています。

例えば、画一的な学習内容によって国の価値観が半強制的に植えつけられる、能力の差を無視したカリキュラムの中で成績が重要視されるため個性が評価されにくいなど、魅力的なこの制度は、裏に複数の欠点を持ち合わせているのです。教育を受ける権利が保障されるのだから多少のデメリットは目をつぶるべきだと思われるかもしれませんが、これらは不登校やいじめといった大きな問題に発展することが少なくありません。中には、耐えられずに自ら命を絶ってしまう若者もたくさんいます。2017年の統計では10代前半の死因1位が自殺という結果となり、日本の義務教育制度を問題視する見方も出てきているのが現状なのです。

また、何のために学校に行くのかがわからないまま通学を強いられることは、若者にとって大きな負担にもなり得ます。本来自ら望んで行かずの「学ぶ」という行為が、「強制されるもの」として身につく、成長とともに知的な好奇心が薄れていく。これは、学びたいのに学ぶことができない難民の方々にとってとても申し訳ないことであるし、恥じるべきことであると思います。

学びたいことを学ぶ。これは難しいことなのでしょうか。

日本では、義務教育を終えても多くの人が高校・大学へと進み、学びを続けます。中には自分の意思で専門大学や短大を選択し、好きなことを仕事にしようと努力している人もいます。ですが、少なくとも私の周りでは、親や周囲の評価を気にして進学するという人がほとんどです。私も例外ではありません。中卒や高卒というレッテルを貼られれば、周りから馬鹿にされ、やりたいことが思うようにできない。そんなこの国の風潮が、ある意味では日本の教育の質を落とし、そして、その風潮に逆らえない私たちは、義務教育終了後も半強制的な「学び」を強いられているのです。

日本は安全で安定した生活を送れる国ではありますが、どこか窮屈で、幸福度指数もそれほど高くはありません。学びたいのに学べない難民の方々と、学びたいことを学べない日本の若者。全く違う環境にいるように見えて、学ぶことに満足できていない点では共通しています。マズーンさんがテントを1張ずつ訪ねて教育の権利を訴えたように、私達も現状に満足せず、全国民が自分らしく学べる権利を追求していきたいです。

橋本 咲弥

優秀賞

神戸大学附属中等教育学校 4年（高校 1年生）

木下 景文 さん

Kagefumi Kinoshita

マズーン・メレハン様

どのような境遇にあっても、教育を受けることができれば将来を切り開くことができる、との考えから難民キャンプをめぐる、若者を励まし、難民が教育を受けるための活動を続けるあなたの姿勢に接して、私の取り組みとのつながりに気づいたので、お便りします。

シリアの内戦による空爆は、テレビなどの報道で見て知っています。ビルが崩れて、暮らしていた人々が瓦礫の下敷きになり、銃撃が繰り返され、眠れない日々を暮らす様子は日本でも報道されました。難を逃れるために、多くの難民が危険を冒して地中海を渡ってギリシャやイタリアを目指す姿、さらに長い陸路を経てドイツに入国しようとして、それが認められないうで、駅に足止めされる様子がテレビに映し出されていた画像は、忘れることができません。

私は、小学生のころにドイツで暮らし、現地の日本人学校に通い、今は帰国して日本の高校に通っています。外国に暮らす不便さは知っていますが、外国でも日本語で日本の教育を受けることができ、みんなが勉強を続けられる、勉強をしないと言われる環境が当たり前で用意され、授業を受けさせられていると感じることもあります。

ですから、シリアの内戦、難民について知識を持っていても、私の暮らす環境はシリアの人々とは違い、恵まれすぎていると感じます。日々の学習に追われていると、勉強に集中することが難しいということが、どのような環境なのか想像しにくいとも感じます。しかし、難民キャンプで戦火におびえるような環境で、夢を叶えるために、努力し続けた意志の強さが、素晴らしいと思います。

学校の研究課題で、私は、移民や難民の人が移住先の国で差別を受けたり、コミュニティになじめなかったりするということを今年の春まで調べていました。その子孫たちは、祖国と移住先の文化の違いに挟まれて、先祖の使う言葉と、住んでいる国の言葉のどちらも不完全なまま社会に出ています。彼らの受けられる授業も、教育の制度も、他の人に比べて制約がかけられていることを知りました。

難民が安全な国にたどり着いて、夢を叶えるために勉強しようと希望を膨らませるとき、思う存分勉強ができるかどうかは、難民を受け入れる国、社会の側の受け止め方、受け入れ態勢によって左右され、そこから先も解決されるべき課題が多いのが現実です。私の研究は、まだ始めたばかりです。英国のブレグジットも、ドイツのメルケル政権が苦戦しているのも、移民を素直に受入れることの難しさから出ています。調べれば調べるほど、難民や移民の抱える問題は広い範囲にわたって、難しいと感じています。それでも、マズーンさんが夢を持ち続けることの大切さを語り続けているので、私も、難民受け入れの問題が少しでも解決されるように、関心を持ち、研究を深めていきたいと思っています。

木下 景文

優秀賞

ユナイテッド・ワールド・カレッジ ISAK ジャパン 2年

久我 優衣奈 さん

Yuina Kuga

Dear Muzoon Almellehan,

Hearing cicadas singing, I am writing this letter to you sitting on a grass field, taking a little break from studying. I woke up at six in the morning and ate breakfast before going to school, as usual. I had mathematics, economics, biology, English, and Japanese lessons today. If it were the old me, I would have probably spent time doing something else. "Just another long day of a school," I would have thought. What is the point of focusing on classes?

Since I was little, going to school was just a part of my daily routine. I never wished to be at school, I never questioned getting an education. In my community, it was just how it worked. Every morning when I stepped on a school bus, I heard my friends complaining. Many of them skipped classes just to watch a movie. It was natural for us. It was how it worked.

I am now studying at an international school, where more than 70 percent of the students are receiving financial aid to be here. Some have lost their parents, some were born and raised in slums, and some were refugees like you before coming to study here. They are the first ones in their families to be in a school. Whenever I hear stories from my friends, I remember your quote, "Never stop learning and never stop dreaming. Never lose hope," because this was how my friends could come here. We often talk about our privilege, but here, it does not mean how much money we have or which countries we are from. Every one of my friends say that they are already privileged more than anyone because they could earn a chance to get an education. "The condition of my country gets worse and worse, but I never gave up my hope once: to be educated," my senior once said.

Now, being surrounded by young and passionate people, I am finally feeling the importance of education. I know it took a lot of time, but I am truly enjoying being here and learn new things everyday. I still remember reading your quote somewhere; you said that "Education is everything. Without it, we are nothing." Now I know the meaning of your words. If I did not have a chance to get an education, what would I have been?

I am grateful for my "privilege," and hopefully some day, may I return this appreciation to all the children who are seeking opportunities to get an education now.

Education is power. I believe in this.

Sincerely yours,

Yuina Kuga

優秀賞

中国上海市 上海中学国際部学校 Grade11

王 萌 さん

Moe Wang

Dear Muzoon Almellehan,

After having the chance to read your letter, a question crossed my mind: Refugee. When I hear this word, what pops up in my mind first? Is it a grim picture of a young mother holding a baby in her arms? Or does it simply lead me to relate to words like victims, hunger, weakness? Not wanting to sugar-coat myself, my first, truest impression of the word was something negative: the hopelessness, the plight. Yet, in your eyes, Muzoon, the word refugee reflects as a kind of strength, power, and pride. Upon seeing your confident shadow, I was humiliated by my own ignorant thought.

As the media today cast eyes on the issue of refugees, I noticed how they often only depict them as weak people, as survivors, victims, migrators. Unknowingly, this one-sided impression of refugees has influenced my view of them. But through Muzoon, I saw the positivity living inside refugees. From your strong inner power, it has personally influenced me to believe in myself and that anything is possible if I never lose my hope, like you said in the letter. As a junior myself, I struggle a lot and feel anxious about deciding my future path and college. I fear the risk of whether I would really be able to get into my dream college or what others would think about my future goals and what I really want to pursue. One of my life dreams is to get my artwork published in a magazine called NYLON through "open submission". I hesitated a lot, feeling unconfident about submitting my drawing. However, I am now encouraged to believe in myself and give it a try; because through you, I learned that if we have love and hope for what we pursue, it is always possible and truly doesn't matter how others think about us.

Even under the difficult times, you have never given up on your goal to let all the Syrian refugee children, especially girls, receive equal education; your existence has shown us that refugees are strong people who can equally make a change and have big dreams; and you have shown us that nothing, whether one's status as a refugee or one's gender as a girl, should stop us from learning, dreaming and voicing ourselves. For this, you have no idea how much hope and inspiration you have given to the world. We thank you for your action.

Sincerely yours,

Moe Wang

優秀賞

立教女学院高等学校 2年

山本 千聖 さん

Chisato Yamamoto

マズーンさんへ

14歳という多感な時期に、突然故郷シリアを離れなければならなかったあなたの経験は、想像を絶するほど困難と悲しみの連続であったことでしょう。今、もしあなたのように不条理な理由で、ほとんど荷物を持つこともできずに、急に異国で暮らさなければならなかったとしたら？ 想像することすら難しく、大切な物だけ持参を許されるならば、教科書だけ大切に持ち運ぶことは私には考えられませんでした。私にとって、あなたの行動はあまりにも立派で勇気があって、尊敬の念を抱かざるを得ません。私がかつて同じ境遇だとしたら毎日嘆き悲しむばかりで、過酷な境遇の下、自主的に教育の必要性を周りの大人に説得することができるのでしょうか。あなたの勇気と行動力とあふれる愛情に、ただただ脱帽するばかりです。

私は、昨年8月からアメリカのテキサス州オースティンに長期交換留学した際、難民の子ども達に英語を教えるボランティアに何度も参加しました。彼らは英語を話したり理解したりはできますが、読み書きができないため、学校の授業についていけない状況でした。私がプリントを渡し、「一緒にやってみようね。」と声をかけても、子どもからそのプリントを投げつけられたり、ゴミ箱に捨てられてしまったり、どうしてよいか分からず最初は泣きたいほど辛い事ばかりでした。どうしたら彼らが心をひらいてくれるのだろうと必死に考えました。子ども達は理由も分からず故郷を離れ、異国で急に生活することを強いられていることを想起し、まずは彼らに寄り添い、距離を縮めていかれたら良いのではないかと考えました。楽しい話をしたり、一緒にゲームをしたり、校庭で遊んだりして過ごすうちに、徐々に勉強に興味を示すようになり、生き生きとした目で自ら学ぼうと変化してきました。私は毎回子ども達の成長に驚かされると共に、とても嬉しく思い、苦しく悲しい境遇の中でも、懸命に学ぼうとする彼らの意欲と強さに大変感動しました。

私は、残念ながらアメリカ留学中の今年冬に希少な病を発症し、アメリカの病院で緊急治療を一か月受け、今も日本で治療を続けています。診断時は最低半年間は学校に通うことができなくなると医師に言われ、今まで当たり前に関心があった学校生活が奪われるように感じ、絶望的な気持ちになりました。しかし実際は、高校の先生方と院内学級の先生方のご協力により、治療しながら院内学級で勉強を続けることができています。闘病中の私は辛い治療に耐える毎日ですが、大勢の方々に温かく支えられているので、とても恵まれていて有難いことと実感しています。私も病を克服し、世界中の子ども達の幸せと、その先につながる世界の平和のために、日本や海外でボランティア活動に積極的に参加したいです。将来は、世界中の子ども達が安心して平等に質の良い教育を受けられる世の中にできる仕事に携わり、あなたにお会いできれば嬉しいです。いつかあなたとお話できる日を夢みて、治療を乗り越えたいと思います。

山本千聖

募集要項

- 募集内容** ● マズーン・メレハンさんに宛てた手紙形式のエッセーを書いてください。英語の場合は400words程度、日本語の場合は1,200字(横書き)程度にまとめてください。
- 応募資格** ● 高校生(国籍・学年・性別・居住地は問いません)
- 応募方法** ● ①A4またはそれに準ずる大きさの用紙で手書きまたはパソコン使用。
②応募作品に、氏名(フリガナ)・性別・住所・電話番号・高校名(所在県名)・学年を記載した表紙(上記①と同じ大きさの用紙)を添付して、下記に郵送してください。(ホッチキス留めはしないでください)
- 郵送先** ● 〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-9-9 TSビル1F
(株)栄美通信 津田塾大学 高校生エッセー・コンテスト係
- 募集期間** ● 2019年8月1日(木)～9月5日(木)必着
- 表彰** ● 最優秀賞1名(賞状及び副賞5万円を贈呈)
優秀賞若干名(賞状及び副賞1万円を贈呈)
最優秀作品は、10月13日(日)津田塾大学において表彰し、津田塾大学広報誌『Tsuda Today』と津田塾大学ウェブサイト、優秀作品は津田塾大学ウェブサイトに掲載・公表します。また、入賞者には10月11日(金)までに本人に通知します。なお、応募作品は返却しません。応募作品の著作権はすべて津田塾大学に帰属します。
- お問い合わせ** ● 津田塾大学ライティングセンター
高校生エッセー・コンテスト係
TEL : 042-342-5129 E-mail : essaycon@tsuda.ac.jp

津田塾大学ウェブサイトで、第1回～19回の高校生エッセー・コンテスト選考結果等を掲載しています。

<https://www.tsuda.ac.jp/>

応募者在学高校 (2019年度)

都道府県	公私	学校名
北海道	道立	旭川南高等学校
	道立	上ノ国高等学校
	私立	札幌国際情報高等学校
宮城県	市立	仙台市立仙台青陵中等教育学校
	私立	仙台白百合学園高等学校
	県立	仙台二華高等学校
福島県	県立	会津学鳳高等学校
茨城県	県立	下妻第一高等学校
栃木県	県立	佐野高等学校
埼玉県	私立	青山学院大学系属浦和ルーテル学院高等学校
	私立	浦和明の星女子高等学校
	私立	開智高等学校
	県立	坂戸高等学校
	国立	狭山ヶ丘高等学校 筑波大学附属坂戸高等学校
千葉県	私立	芝浦工業大学柏高等学校
	私立	渋谷教育学園幕張高等学校
	県立	生浜高等学校
東京都	私立	郁文館グローバル高等学校
	私立	江戸川女子高等学校
	私立	大妻多摩高等学校
	私立	大妻中野高等学校
	国立	お茶の水女子大学附属高等学校
	私立	学習院女子高等科
	私立	工学院大学付属高等学校
	私立	國學院大學久我山高等学校
	私立	国際基督教大学高等学校
	私立	渋谷教育学園渋谷中学高等学校
	私立	自由学園女子部高等科
	私立	松蔭高等学校
	私立	頌栄女子学院高校
	私立	白梅学園清修中高一貫部
	私立	白梅学園高等学校
	私立	杉並学院高等学校
	私立	成蹊高等学校
	私立	聖心インターナショナルスクール
	私立	拓殖大学第一高等学校
	私立	玉川聖学院
	私立	中央大学高等学校
	私立	帝京高等学校
	国立	東京学芸大学附属国際中等教育学校
	私立	東京家政大学附属女子高等学校
	私立	東京純心女子高校
	私立	創価高等学校
	国立	東京大学教育学部附属中等教育学校
都立	小石川中等教育学校	
都立	松が谷高等学校	
私立	富士見丘中学高等学校	
私立	雙葉高等学校	
私立	富士見中学高等学校	
私立	立教女学院高等学校	
神奈川県	県立	相模原中等教育学校
	県立	弥栄高等学校
	私立	カリタス女子高等学校
	私立	桐光学園高等学校
	私立	聖園女学院高等学校

都道府県	公私	学校名
神奈川県	私立 私立	洗足学園高校 捜真女学校高等学部
富山県	私立	富山国際大学附属高等学校
石川県	県立	金沢二水高等学校
長野県	県立 私立 私立	上田高等学校 ユナイテッド・ワールド・カレッジISAKジャパン 文化学園長野中学高等学校
岐阜県	県立	岐阜商業高等学校
静岡県	県立 県立 私立	浜松北高等学校 富士宮西高等学校 静岡雙葉高等学校
三重県	県立 県立	川越高等学校 津西高等学校
京都府	私立	立命館宇治高等学校
大阪府	市立 国立 私立 私立 私立 私立	大阪市立南高等学校 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 関西学院千里国際高等部 清教学園高等学校 四天王寺高等学校 城南学園高等学校
兵庫県	私立 国立	神戸女学院高等学部 神戸大学附属中等教育学校
広島県	私立	AICJ高等学校
山口県	私立	サビエル高等学校
徳島県	県立	徳島文理高等学校
香川県	県立	善通寺第一高等学校
長崎県	県立	諫早高等学校
熊本県	県立	第一高等学校
宮崎県	県立	日向高等学校
アメリカ合衆国		Choate Rosemary Hall Geffen Academy at UCLA (Los Angeles, CA) Olympia High School McLean High School Walter Johnson High School ワシントン日本語学校高等部
中国		Nord Anglia International School Shanghai Pudong 上海中学国際部学校



株式会社栄美通信は、広告代理業として各事業(進学情報事業・企業広報事業・教育広報イベント事業・企業広報イベント事業・進学情報誌出版事業等)の個人情報適正に取り扱い、個人情報の保護を徹底することが社会的責務であると認識し、「個人情報保護方針」を制定してお客様に安心して弊社のサービスをご利用いただけるよう、全従業員がこの方針に従って個人情報保護に対する取り組みを実施しております。個人情報についてのお問い合わせは【お客様相談窓口】TEL 03-3561-0471(平日10:00～17:00(12:00～13:00)と土日祝日を除く)



津田塾大学
TSUDA UNIVERSITY



<https://www.tsuda.ac.jp>